巻頭言

「山形をつくる人」をつくろう

社団法人日本青年会議所　東北地区
山形ブロック協議会二〇〇〇年度会長
齋藤裕之

親日家として、また慈覚大師円仁の研究家としても大きな業績を残されたライシャワー元駐日大使の山形県民にあてた寄稿の中に「…主要地域とは遠くない所に、もう一つの日本が存在するのです。（中略）山形が過去の日本であるばかりでなく将来の日本であると共に発展の余地があり、しかもその発展には自然と人間の喜ばしい均衡を決して損なうことのないものであって欲しいと私は望んでいます。（中略）将来において自然と人間が健全なバランスをとっている、そのようなもう一つの日本に日本全体がなることを望みます」という一節がある。

地方分権一括法も施行され、自らが自ら住むまちを創っていかなければならない今、非常に示唆に富んだ内容で、まさにこれからの山形の進むべき方向を明確にあらわしているように思う。幸いにもＩＴ（情報技術）の発達で情報のタイムラグがなくなり、地方ならではの優位性を発揮できる環境になってきた。インフラの整備にしても各県各様に進めるのではなく、広域的な連携をとって無駄な投資や環境の破壊をすることなく共有化をはかり、山形だけではなく東北としての価値を高めるということが肝要であると思う。そのときに経済最優先ではない価値観を山形として東北に示すことができないものか。つまりさして必要のないものは他の地域に整備してもらってよしとする勇気だ。明るく豊かな社会とは決して物質的な充足感ではない、ということを我々は長い時をかけて実感として学んだはずである。ものに縛られているかぎり海水を飲んでいるのと同じで飲めば飲むほど乾くということだ。それよりも今あるものの価値を再発見し、それを十二分に活用しすばらしい人間を育てていくことこそ、これからの山形のプライオリティである。

いうまでもなくすべての基本に人間がある。どんなに素晴らしい法律や技術を創（つく）ってもそれを使うのは人間である。「教育を誤ることは国を誤ることだ」といわれるが、学校教育の中にもっと頻繁に地域の人に入ってもらって、まちの歴史を語ってもらったり、経済的な視点から職業観というものを養うために経営者に教壇に立ってもらったり、日本的な価値観を宗教的な見地から僧侶に講話していただいたり、フレキシブルな対応が出来ないものか。ここで学校で行う宗教的な色合いの講義の是非を問うつもりはない。ただ最近すべての権利が天賦のものと拡大解釈しがちな子供が増えているのでは、と憂えるのだ。個と公の調和の取れた社会では、権利は社会的なものであればあるほど、すべてのことがらに無条件に認められるものではない。権利の獲得のためには、それに見合う義務を遂行することが必要で、苦労しつつ答えが与えられるものだと認識できるような教育をしなければならない。教育というのは当然学校だけに任せていい問題ではないし、家庭はもちろん、地域の人々が温かい愛情を持って子供たちに接すべきものである。東北独自の厳しさと豊かさがはぐくんできた生活、文化を検証し、素晴らしい東北の歴史、文化、技を子供たちに伝えていく事こそ、子供たちが知力と活力とを兼ね備え、積極的に社会にコミットしていく人間力豊かな大人になるために、重要な事だと考える。

青年会議所は地域の先生づくりという活動や新しい社会システムの構築の提唱を通して、職場の、あるいは地域の、また異なる団体やＮＰＯ（非営利組織）の青年と一緒に、なにが正しくて何が正しくないのかをしっかり判断できる価値基準を内に宿し、東北の山形であるからこそできること、東北の山形でしかできないことを、民度の高い積極的な地域住民として、これからも模索していきたい。